

2024年6月12日 交通脱炭素シンポジウムⅡ
～脱炭素における運輸セクターの将来展望～
屋井所長 閉会挨拶

皆さま、本日は長い時間ありがとうございました。モデレーターを務めていただいた山内先生、基調講演をしていただいた秋元先生、そしてご登壇いただいたパネリストの皆様、大変ありがとうございました。

本日のシンポジウムでは、マクロかつグローバルな視点の基調講演から始まり、最後は運輸産業の分野横断的な課題・取り組みといったミクロな話が展開されました。ご来場いただいた皆様の他にも多くの方々がオンラインにて参加いただきましたが、皆さまが本日のシンポジウムを通して、どのような印象を持たれたのかが私の関心ごととなっています。

パネルディスカッションの最後に、人流・物流問わず運輸全体の視点で考えようとのご提案がありましたが、これはまさに我々も持つべき視点です。

質疑応答ではインフラ整備に関する話ができましたが、これは環境と経済の両立に関する問題であり、何十年も前から常に課題として議論されてきています。政策として継続性をもって取り組んでいく姿勢が大事ですが、国としてもこの重要性を認識していることを改めて感じることができました。

本日のシンポジウムでは、運輸総合研究所が昨年より研究してきた内容を公表させていただきました。その内容は、「現状の燃料転換と技術開発のペースでは2050年運輸分野のカーボンニュートラル達成が難しい。とはいえ、早く脱炭素化に取り組まなければカーボンコストは徐々に高くなってしまいうため、早く取り組むべき。」ということです。しかしながら、本日の議論を踏まえると燃料転換を促進するだけでは十分ではないことも分かりました。セクター横断的な考えに加え、将来のリスク分散、分散共生型社会、大都市・

地方、等といった様々な要素をそれぞれ広く深く見ていくことが重要だと改めて理解いたしました。

運輸総合研究所としては水素に特化した研究も進めています。会長が冒頭挨拶で申し上げたように、脱炭素化の問題に対して日本はまだ見通しが立っていない状況ですが、飛行機の世界で着陸寸前まで見通しがない状況で安全な着陸を可能とする CAT 3 という技術があります。将来が見えない中で前に進みつつ、変化する将来に合わせて対応を変えられる柔軟性も必要です。今後日本のテクノロジーによって脱炭素化の課題を解決できる可能性もあります。

基調講演において、ハイブリッド車の多い日本で輸入された合成燃料を多く利用することによってカーボンニュートラルが達成される世界観も記載されていましたが、輸入に頼るだけでは残念です。ペロブスカイト太陽電池をはじめ、まだまだ日本から新しい技術がでてくるはずであり、代替燃料についても日本が技術的に先導できるようなことがあれば大変喜ばしく思います。

脱炭素化に関する問題は簡単に解決できないのは明らかであり、研究所としても研究を継続していきたいと思っているので引き続き皆さまのご支援・ご協力を多方面からいただければ幸いです。本日は長い間、誠にありがとうございました。